
自分の中、もう一人のVampire

因幡 悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自分の中、もう一人のVampire

【Nコード】

N8359L

【作者名】

因幡 悠

【あらすじ】

自分が変わっていく、、、。

吸血鬼 ヴァンパイア の凶暴な本能に吞まれる。

人格の覚醒

十六歳になった次の日、自分の中のもう一つの人格が覚醒した。

最初は気のせいだと思っていたけれど、頭の中から話し掛けて来るアイツは確かにいた。

それがこの頃、変な事を言うようになった。

『お前は人間じゃない』

そう、毎日毎日繰り返す。

もう耐えられない。

「父さん。少し良いか？」

「うん？珍しいな」

軽く笑う父さんに、思い切って人格の事を打ち明けた。

「そうか・・・とうとうお前にも来たか・・・」

どう言う事だ？

「何だよそれ」

一瞬戸惑いながらも、父さんは訳を話した。

「“お前は人間じゃない”。確かにそう聞こえるんだな？」

「そうだ」

「・・・オレ達はな、皆人間ではない。異種族・・・吸血鬼ヴァンパイアなんだよ」

ヴァンパイア
吸血鬼

「は？何・・・言っただよ？オレは今までずっと人間として過ごして来て・・・血が・・・欲しいと思った事なんか一度もない！！！」

「当たり前だ。ヴァンパイアの本能が覚醒するのは十六歳を過ぎてからだ」

そんな事があつてたまるかよ！

今まで普通に過ごしてきたのにヴァンパイアだっただけ？

ふざけるのも大概にしるよ！

底なしの不安と衝撃に襲われた。

「父さんにも・・・もう一つの人格があるのか？」

「あるよ」

オレが知らなかっただけか。

「見たいのか？」

「・・・ああ」

「最初に言つとくが、裏の人格を出すと凶暴性が増す人が多い。オレは大丈夫だが、他では気を付けろよ」

そう言つと、父さんは椅子から立ち上がる。

「よく見てろよー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・で？」

特に変わった様子はない。

『で？じゃねえよ。変わってるじゃねえか』

変わっていた。

そこには声は同じでも、立ち振る舞いや雰囲気が違う父さんがいた。

「父さんなのか？」

『そつだよ？お前のと・う・さ・ん』

父さんは伸びをした後、ゆっくりと歩き出した。

「何処行くんだ？」

玄関へ向かう父さんに声をかけると、父さんは不思議そうな顔をした。

『血イ吸いにだろ？』

は？

「ちょっと待てえ！」

何だって？

“血イ吸いに”だと？
やっぱりヴァンパイアなのか？

「ああもう！戻れえ！！元に戻れ！」

急いで怒鳴った。

『んだよお・・・久々に外に出られたのによお』

軽く舌打ちをすると、また雰囲気が変わった。

「父・・・さん？」

「ん？どうだった？」

安堵の溜め息が零れた。

「なんちゅーか、大変な人だった・・・でも、凶暴ではなかったよ」

「あはは。そうかそうか。まあしかし、お前は気を付けろよ？オレはもう一つの人格と意志疎通が出来るから良いが、全てがそうとは限らない。お前の場合はとても凶暴で、言う事を聞かないかも知れないからな」

「分かった」

そう応えると父さんは安心した様で、顔を綻ばせた。

「それで、他に聞きたい事はないか？オレで答えられる事ならなんでも良いぞ？」

「オレ達は血を吸わないと、生きていけないのか？」

「いや、別に大丈夫さ。血は吸わなくても変わらない。まあ吸ったら吸ったで身体能力が上がったり、気持ち良くなるだけって感じ？あつ！でも、月に一回位はどうしても血が欲しくなる時あるぞ？」

「そんな時父さんはどうすんだ？」

聞くと父さんはにやりと笑った。

「愛する妻から・・・ね」

結局貰うんか。

「へえ」

「じゃあ、もう一つの人格を封じ込める方法は？」

「封じ込めるのは無理だろーよ。本能だし」

「そんじゃどうやって抑制きかせるのさ？」

「うーん・・・理性？」

適当じゃんか。

「まあでもさ、お前も頑張れよ！」

「何をだよ」

「何かをだよ！」

溜め息をつくオレの頭を撫で回しながら父さんが言った。

「応援してんからな。出来る限りの事はやってやんよ」

オレのさっきまでの不安は消え去り、本当に笑顔になっていた。

「ありがと。頑張ってみるよ。出来るだけはな。また相談するな」

「ああ」

父さんも笑っていた。

この後、どんな試練があるかなんて想像してなかったけれど。

侵食

今まで学校が苦痛だと思った事はなかった。
そんな学校が今は耐え難い。

周りから美味そうな匂いがする。

喰いたい。

喰いたい！

外に出せ！

「五月蠅い・・・・・・・・・・！」

話し掛けてくるな！

オレの中から出てけよ！

ずっと話し掛けて来るもう一人の“オレ”に、苛立ちを感じていた。

「尊^{みこと}・・・大丈夫？」

「千春^{ちはる}・・・」

いつものオレと違和感を感じたのだろう。
友達の千春が心配そうな声を掛けた。

「顔色悪いよ？体調悪いの？」

普段なら心配してくれるのはありがたいが、今日に限っては近寄らないで欲しい。

何をしちまうか分からない。

「ん・・・大丈夫・・・。何ともないから」

体が怠いのは、単に血が欲しいからだろう。

分かっているさ。

アイツが騒ぎ立てるから。

嫌でも思い知る。

そして思い出す。

『お前は人間じゃない』

未だに心配そうにオレの周りを彷徨っている千春を退けると、屋上へ走った。

人が居ない所へ行きたい。

匂いが敏感過ぎる嗅覚を刺激して、目覚めたばかりの本能が暴走してしまう。

屋上の扉を勢い良く開け放ち、転がり込んだ。

「ハッ・・・ハアッ」

呼吸が荒い。

その場に座り込み、深呼吸した。

落ち着いたら、またアイツが話し掛けてきた。

『何故逃げる？お前は目覚めたばかりで、一番血を欲する時なのに』

「黙れ」

『本能に逆らうなよ。オレを外に出せ』

「出たきゃ出れば良い」

『そも行かないから出せって言うてんだよ。オレは血が体内に入
ってこなきゃ、自力ではどうにも出来ない』

「そうか・・・そりゃいい事聞いたよ」

絶対に血を吸わなけりゃ良いんだろ？
簡単じゃないか。

「血を吸わなくても死なねえなら、オレは絶対吸わねえよ」

『まあ、せいぜい頑張れば良いさ』

“抗う事は不可能だからな”と言い残して、アイツは静かになった。
今、予鈴が鳴った。

「行かなきゃ・・・」

立ち上がった途端、視界がブレた。

「あ・・・れ？」

何かが倒れる音。

「くそっ・・・体が動かねえ・・・！！」

またアイツが出て来やがった。

『血を吸わなくても死なねえけど、どんどん弱ってくんだぜ？』

「んだよ・・・それ・・・」

『不便なものでよお。死なねえのに弱ってくんだぜ？最悪だと思わねえ？お前は目覚めたばかりだから、余計弱りやすい。血を吸わねえと動けねえよ。尤も、血を吸ったらオレも力を得ちまう。どうするよお？』

良しさ。

やってやるよ。

オレはお前に勝ってやる。

オレは自分の手首に牙を突き立てた。

「痛ってエ！」

体全体に激痛が走る。

『クククツ・・・』

痛みに藻掻くオレを、アイツは笑った。

『バアー力。そんな弱った体、取ったところで自由に動けもしねえ。今日は眠る。』

だったら最初から出て来るなよ。

ふらつく体は再び倒れ込み、オレは意識を失った。

自分の“身体”？

「尊！尊！！ねえ！しっかりして！」

「んっ・・・」

誰だ？

オレを呼ぶのは。

「千春！尊は！尊はいたか！？」

「^{ながれ}流！早く！！」

五月蠅いな。

「尊！おい！大丈夫か！？」

「あっ・・・？なが・・・れ・・・？」

そうか。

流か。

加藤 流。

オレの親友。

医者を目指していて、家族も医者一家らしい。

そんなんで相当医学にも詳しい。

まあそれは置いておこう。

それどころじゃない。

オレが。

「何でこんな所で寝てんだよ！？とつくに昼だぞ！」

「ははっ・・・寝てたつつつか、気を失ってた感じ？」

「貧血か？顔色悪いぞ？」

「私も心配したんだからね！」

「ああ・・・ごめん」

そう言つと安心したのか、教室に戻ると言い出した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・歩けよ」

ちよつと待て。

「貧血なんですケド。連れてつてよぉー」

「死ね」

とか良いながら連れてつてくれるんだよね。

しかし、教室行って神経保てるかな？

『自信ねえのか？』

また出て来やがった。

オレは、流達には聞こえない程小さな声で呟いた。

「黙ってるよ」

『嫌だね。今度はお前が少し黙る番だ』

「はっ！？」

そこでブツリと何かが切れた。

「尊？どうした？」

支えてくれている流が、心配そうな顔で見ている。

『流れ。オレさあ、保健室に行くわあ。ほら、腕も怪我してるしなあ』

オレがわざわざ隠していた腕を、大っぴらに掲げて見せた。

「なっ！？いつの間にそんなになってたんだよ！」

『さっきだよ、さっきい。ほら、予鈴鳴ってる。センサーに言っていないなあ』

「分かった・・・」

渋谷教室へと走って行く流達を見送りながら、一人ほくそ笑む。

『初めての体だあ。まずは慣れだな。取り敢えずは包帯でも貰ってくんか』

ひたひたと廊下を歩く。

オレの意識はあるのに、体は言う事をきかない。

オレの体なのに、オレの“身体”じゃない。

アイツの体。

『あ？まだ意識あったのかよ。五月蠅いから寝とけ』

そこで意識を本当に失った。

『さあーて、ここからがオレの領域だ』

不気味な笑みを浮かべ、保健室へと繋がる廊下をオレは歩いた。

『失礼しまーす。センセエ？』

「あら？中島君じゃない」

出迎えてくれたのは、若くて綺麗な保健医。

「ちよつと！？どうしたの！？その左腕！早くいらっしやい！」

左腕の異様な様子に気付いた先生は、オレを椅子へと腰掛けさせた。

「全く……。どうしてそうなったのよ？」

『少し転んでしまつて……。』

「少し転んだだけでそうなるもん？まあ良いわ」

疑いながらも手当をしてくれた。

『ありがと、センセ』

「はい」

それじゃ本題に入ろうかあ？

『ねえ、センセ？オレがヴァンパイアだつて言つたら……。どうする？』

「うーん、そうねえ」

にこにこ微笑む先生。

『笑つてるけどさあ……。本当だよ？』

「えっ？」

驚いた顔がそそるねえ。

『オレねえ、すつごおーく腹減つてんだよねえ。先生、提供してく
んない？』

「何……。を？冗談……。よね？」

『うーん、本気だよお？だからくれない？血イ』

じりじりと壁際へ追い詰めて行く。

『大丈夫。痛くしないしい。あるのはさあ、快樂だ・け』

「やつ……。中島君……。！止めっ……。っ」

突き立てられた牙は、首筋へと埋まつていく。

目覚めてから初めて味わつた、他人の血の味。

力が漲つて来るのが分かる。

暫く血を貰つた後、先生を椅子へ座らせた。

『ありがとっ、先生。今日の事は秘密ね?』

先生は呆けたまま、頷く。

『じゃあね』

満面の笑みを浮かべ、保健室を去った。

『さて、力も出て来た事だし、これからは楽しい事がたあーくさんだねえ』

その時、“表”が起きてきた。

「・・・ろ・・・やめろ・・・」

『っあ? なんだよ・・・出て来ようってかあ・・・?』
頭が割れるように痛い。

『お前も・・・分かっただろう?・・・っ力があ・・・漲るのを・・・
・!』

「力なんて・・・必要としてない。オレの“身体”だ・・・返せえ
!」

『くっそ!』

オレが引つ張られる?

やっと好きに動くのに!?

でも、抗う力がない。

逆ラエナイ?

「っは・・・はっ」

やっと裏から“身体”を奪い取った。

「っ・・・気持ち悪い」

気持ち悪い?

「・・・違う」

アイツの言う通りだ。

力が漲り、気分が高揚していた。

「やっぱりオレも化け物かよ・・・!」

言いようのない絶望感がオレを襲う。

オレは一人、涙を流した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8359/>

自分の中、もう一人のVampire

2010年10月28日07時13分発行